

# 教養教育における地域資源を考える旅の創造

—京都大学COC科目での取組—

安藤 哲郎

- I. はじめに
- II. 大学COC事業と地域
  - (1) 大学COC事業と地域に関わる展開
  - (2) 京都大学の大学COC事業と地域に対する取組
- III. 授業開設の経緯と準備
  - (1) 大学COCへの参加の動機と授業提案の背景
  - (2) 授業開設へ向けた準備
- IV. 授業内容と歴史地理学
  - (1) 開講の形態
  - (2) 授業の目標と進行
  - (3) 歴史地理学と旅のプラン
  - (4) 授業の意義
- V. まとめと今後の課題

## I. はじめに

2013年の旧稿で、筆者は歴史地理学からの発信を積極的に行いたい旨を記した<sup>1)</sup>が、その1つの機会として大学における「教養教育」が挙げられるのではないかと考える。現状では、多くの受講者が「歴史」と「地理」を分離して扱うことを意図しないですむ場面が、大学の教養教育しか見当たらない、というのが大きな理由である。ただ積極的に述べるなら、(学部・学年等をまたがって)幅の広い受講者がいるため、広範に歴史地理学の魅力を発信できる可能性がある、ということ

も理由として挙げたい。

一方、2016年度歴史地理学会大会の共同課題となっている「地域資源」について、前年度のシンポジウム趣旨説明で湯澤により、「地理学や様々な社会活動の中で「地域資源」という言葉がしばしば用いられ、活用が模索されていること」と「地理学以外の様々な分野においても「地域資源」に関わる諸事象が活発に議論されていること」の2つの研究動向が挙げられている<sup>2)</sup>。「地域資源」が地理学にとどまらない、幅の広い展開をする中で、「地域資源」に関わる授業を、幅の広い受講者が集まる「教養教育」で行うことには、意義があるのではないと思われる。

幸い、筆者が担当している教養教育において受講生に提出させる旅を創造する課題が、「地域資源」を考えようという形で行われるべき内容であるため、本共同課題にて報告を行うことにした。本稿では、筆者のCOC授業における取組を手がかりとして、教養教育の中で歴史地理学を活かしつつ、「地域資源」を考える旅の創造という形へ結びつけることができるのかを考察したい。

## II. 大学COC事業と地域

### (1) 大学COC事業と地域に関わる展開

大学COC (Center Of Community) 事業とは、「地(知)の拠点整備事業」という、文部科学省が「全学的に地域を志向した教育・研

---

キーワード：大学COC事業、京都、教養教育、旅、地域資源

究・社会貢献を進める「地域のための大学」として」「大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を育成する」目的で<sup>3)</sup> 2013(平成25)年度から行っている、高等教育への助成事業である。目的から推察すると、地理学から貢献できる部分も大きいと考えられるうえに、「地域資源」を活かした内容も十分活用できると考えられる。

実際に、各地の大学COC事業が「地域」に対する取組を実践している。例えば、具体的な地域と連携して地域の資料をアーカイブするものとして、大阪市立大学は、西成地域で写真・地図・文書等の地域の資料を収集し、展示や解説を行ったり、スタディーツアーを行って学びあう機会を設けたりしている<sup>4)</sup>。また、観光について学び、地域活性化へ結びつける例もあり、名古屋学院大学では、観光を専門課程ではなく地域づくりの観点から取り上げ、地域活性化に貢献しうる社会人を育成する教育を可能にすることを目指している<sup>5)</sup>。さらに地方自治体と協働し新しい教員養成システムを構築するものがあり、宮城教育大学では、教員が多様な視点やノウハウを授業に取り入れ、自ら学び続けることのできるネットワークサービスの構築を行っている<sup>6)</sup>。

このように、大学を越え、地域一般にアプローチしようとしている点が特徴的であり、地理学も十分に役割を果たせる事業であると考えられる。

## (2) 京都大学の大学COC事業と地域に対する取組

筆者が関係している京都大学の大学COC事業は、「平成25年度 地(知)の拠点整備事業(KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成) 地域志向教育研究経費(京都学教育プログラム)」と題するものである。「COCOLO域」と通称し、地域と教職員・学生がコラボレーションして京都の各地

域の課題を解決することを目指している<sup>7)</sup>。

授業の面では、全学生が履修可能な講義・実習の科目群として開講されているが、まず京都に関する講義「まなびよし」で課題の認識を深めることから開始される。コア科目の「京都創造論」では、教員に加えて自治体職員や地域住民、地域で活躍する人々を講師に招いている。続いて、フィールドで実際の問題と向き合う「いきよし」の段階で、学生が地域の人々と協働しつつ調査研究・企画・実行を行い、現実の課題の解決を目指している。一方、地域と京都大学との連携窓口「つなぎよし」として「地域連携教育研究推進ユニット」が窓口機能を整備している。また、学生主体の地域研究のプロジェクトを積極的に後援している点にも特徴があり、各種行われる、地域と結びついたイベントにも関わっている。

次章では、京都大学COC事業に関わる一員として、筆者がどのように関わることになったのか、具体的に述べたい。

## Ⅲ. 授業開設の経緯と準備

### (1) 大学COCへの参加の動機と授業提案の背景

2013(平成25)年度、京都大学は申請していた大学COC事業が採択され、授業の担当者について学内募集を開始した。筆者は当時京都大学助教であったために応募資格があり、「地理と古典を活かした京都の旅の創造と提案へ向けて」と題したプログラムで応募を行った。筆者の文学(古典文学)を用いた空間認識の研究とリンクさせた講義を想定したため、このような標題とした<sup>8)</sup>。その結果、2014年度からの授業開設が認められ、授業準備のための助成を受けることになった。参加の動機となったのは、先述した大学COC事業の目的とする点が、地理学からの貢献の大きい分野であると考えた点にある。

さらに、授業提案の背景として、京都の置

かれた事情がある。京都には年間5,000万人前後の観光客が訪れ<sup>9)</sup>、御所や寺社・庭園をはじめとする観光地を回っていることもあって、現代の京都における最重要産業のひとつは観光業であると言える。観光業の発展を継続するためには、観光客が何回でも京都を訪問する状況であることが望ましいだろう。そのためには、京都の印象が強く残るようになることを期待したいところである。

しかしながら現状は、旅行者が観光地をピンポイント的に（つながりを持たずバラバラに）回る行程が一般的ではないかと推察される。表1には、京都への観光客が目的地としている場所について、最近3年分のデータが得られたため、1割以上の人々が訪れた場所を取り上げ整理したものを示した。旧稿に示した「19歳以下観光客の主な京都市内訪問

地」の表も参考になるが、2015（平成27）年には1割を超える目的地が増加しているものの、ほぼ同様の場所が目的地となり続けていると言える。参考として挙げた主な観光地を見ても、ピンポイント的に回っている可能性が高いことが考えられる。

他方、「京都御所周辺」・「烏丸御池・烏丸四条周辺」という長い歴史を実感することのできる京都の町中の目的地も参考として挙げたが、やや割合が増えつつあるものの主要目的地にはなっていないことが分かる。このようにピンポイント的に観光地を回る方法では京都の町としての印象が強く残らないことが想定され、結果として京都を再び訪れる意欲を喚起できず、将来を通じて観光業が発展できるかどうか危惧される。

そこで、各観光地を有機的につなげ、ルー

表1 京都観光の上位の目的地

| 目的地            | 2015年*<br>(平成27) | 2014年<br>(平成26) | 2013年<br>(平成25) | 範囲に含まれる主な観光地***  |
|----------------|------------------|-----------------|-----------------|------------------|
| 清水・祇園周辺        | 51.0             | 40.9            | 34.8            | 清水寺・八坂神社・高台寺・知恩院 |
| 嵯峨嵐山周辺         | 48.8             | 43.6            | 38.3            | 嵐山・天龍寺           |
| 京都駅周辺          | 44.6             | 48.7            | 37.0            | 京都駅ビル・東寺         |
| 河原町三条・四条周辺     | 29.4             | 32.7            | 34.5            | 四条河原町            |
| 東山七条周辺         | 21.1             | 14.4            | 7.6             | 三十三間堂            |
| 銀閣寺・哲学の道・百万遍周辺 | 19.2             | 11.4            | 8.2             | 銀閣寺              |
| 岡崎・蹴上周辺        | 18.5             | 14.5            | 14.8            | 平安神宮・京都市美術館・南禅寺  |
| きぬかけの路**周辺     | 17.6             | 13.8            | 6.5             | 金閣寺・龍安寺・仁和寺      |
| 伏見周辺           | 11.3             | 5.9             | 7.6             |                  |
| 京都御所周辺         | 5.7              | 4.7             | 2.1             |                  |
| 烏丸御池・烏丸四条周辺    | 4.0              | 3.0             | 2.8             |                  |

単位は%（複数回答のため、合計が100を超える）  
京都観光総合調査（平成25～27年）を参考に作成

（※）2015（平成27）年のアンケート回答者10%以上の目的地となっている場所を基準として並べたため、2014（平成26）年と2013（平成25）年の数値で一部10%を切る場所がある。また、数値は10%を切るが、参考として、下2行に町中の目的地を加えた（10%を下回る箇所は斜字で表した）。

（\*\*）「きぬかけの路」は京都の西北部の、衣笠山の山麓を通り、金閣寺・龍安寺・仁和寺の入口をつないでいる道路を指す。  
（\*\*\*）「範囲に含まれる主な観光地」には、参考として、注1）の表2「19歳以下観光客の主な京都市内訪問地」に掲載された観光地と世界文化遺産「古都京都の文化財」の登録地を記した。

トそのものに意義のあるプランを設定することの重要性を、授業を通じて受講生に理解してもらい、各人の有意義な旅の「創造」を目指したいと考えた。また、京都の旅を魅力あるものにするためには、観光客に加え、プランを創造する学生自身も京都を深く理解できるようにすることが重要であるため、京都の歴史地理の授業を通じた理解を促すとともに、創造した旅のプランを「提案」できることをも目指す形として、授業の準備を行うこととした。

## (2) 授業開設へ向けた準備

2014年度前期の授業開設へ向けた準備を、2013年度後期に行うこととなり、行動を進めた。

まず、授業では京都の歴史地理を「通史的に」扱うことにした。京都が古代から近現代にわたって都市として長く続いてきたうえに、その都度変化をしてきた都市であることを考慮したことが、大きな理由である<sup>10)</sup>。筆者が研究を行っている関係で古代から中世の素材は既にある程度用意できていたので、これに加えて、近世・近現代の資料を中心に整理した。

尚、2014年度から滋賀大学へ転出することになり、授業の担当について相談をしたが、非常勤講師として授業担当者になることが了承されたため、引き続き授業へ向けて各授業の直前まで準備を重ねた。

次章では、筆者がどのような授業を行っているか、具体的に述べていきたい。

## IV. 授業内容と歴史地理学

### (1) 開講の形態

2014年度前期から授業を開講することになったが、授業名は「地理と古典を活かした京都の旅の創造,提案」として「A」を前期に、「B」を後期に開講することになった。また「全学共通科目」で開講されることにな

り、教養教育の中で実践するという形になった。詳細な分類としては、「地域交流・貢献科目」(2016年度からは「キャリア形成科目群」の「COCOLO域」)の中に含まれている。

内容と課題については、前期(A)は古代から中世の京都を題材とし、課題は夏の旅のプランを意識して創造してもらい、後期(B)は近世・近現代の京都を題材とし、課題は冬の旅のプランを意識して創造してもらう形で進めている。夏・冬のプランとしたのは、春・秋といった京都に来訪者が多く混雑する時期を避け、比較的閑散期に入る夏・冬のプランを考えてもらう方が、「提案」という点を考えてもよりよいと思われるからである。

授業担当について、2014年度は筆者単独で行ったが、2015年度はCOC事業を中心的に担う2人の先生方と、2016年度は3人の先生方と共同で実施する形式となった。異分野の先生方にご意見を伺いながら授業を進行することができるうえに、旅のプランの課題などでは多面的な観点から評価をできるため、意義のある進め方となっている。

### (2) 授業の目標と進行

COCの授業では、京都学教育プログラムで設定された培うべき5つの能力と目標があり、それに合わせて本授業においても、表2に取り上げたように育成目標を掲げている。本授業では、設定された5つの能力に合わせた育成目標を立てたが、全体としては、地理や古典から京都を見つめるという軸を設定し(「俯瞰力」)、その学びの成果を活かして旅のプランを創造し(「創造力」)、フィールドワークを行って、その旅のプランを実行可能なものとする(「現場力」)、またその過程に主体的・積極的に関わる(「責任力」)を目標とした。また京都を持続可能な「旅の目的地」とするべく、旅のプランを授業の参加者同士で議論しあい、よりプランが実現可能なものに近づくことができるように

表2 COC授業を通じて培うべき5つの能力と本授業での育成目標

|     | 京都学教育プログラムで設定された目標   | 本授業での育成目標   |
|-----|--|---|
| 責任力 | 自らが京都のあるべき未来像を創造し、実現する責任を担う一主体であることに自覚的である態度                                     | 京都の魅力ある旅を提案することによって、訪れた人々に満足してもらえ、再び訪ねたいという意識をもってもらうことに対して、主体的・積極的に関わろうとする態度                          |
| 俯瞰力 | 京都が抱える現実課題、あるいはこれまで実施されてきた地域志向の取組を、長期展望とグローバルな広い視野、俯瞰的視野のもとで捉え直す力                | 地理や古典から京都を見つめることにより、京都に対する複眼的な見方や新たな魅力の発見ができるようになり、京都を今後も持続可能な「旅の目的地」として、かつ日本文化の中心的な発信地として捉え直すことができる力 |
| 創造力 | 俯瞰的に捉えた課題に対して、本学が有する先進的「知」を活用しつつ、京都の新たな未来像、新たな課題解決策を創出できる力                       | 京都の町の形成過程や構造、空間認識等に関する先進的な「知」を活用して、新しい旅のプランの創造ができる力   |
| 現場力 | 創出された新たな未来像、新たな課題解決策を、資源が限られた条件のもとで実行可能な形で確実に実現させる実務能力                           | 創出された新しい京都の旅のプランを実際に提案することが可能になるよう、自らコースを回る実践を行い、その際に見つけた問題点などを解消して、実行可能なものとする力                       |
| 協働力 | 新たな未来像、新たな課題解決策の創出に向けて学生同士、教員、京都地域関係者と共に議論し、また創出された方策等を学生同士、教員、京都地域関係者と協力して実現する力 | 創出し、実行可能な形となった新しい京都の旅のプランを授業の参加者同士で議論しあい、その議論を活かしながら、実現へ向けて形づくることのできる力                                |

5つの力と京都学教育プログラムの育成目標は「公募要領」より抜粋、本授業の育成目標は授業構想の際に筆者作成

する（「協働力」）、という点もさらなる目標として掲げた。

そして、それぞれの目標に対応する具体的な方法を以下のように設定した。「責任力」・「俯瞰力」・「創造力」は本授業の核となる「旅のプランの創造」を行うことによる育成であるが、歴史地理の授業成果を踏まえたものとなることを目指している。旅のプランが「提案」できるレベルのものを旨とする「責任力」をつけ、そのレベルになるのを助けるために視野を広げることができるように「俯瞰力」を養い、その結果としての「創造力」の発揮となることを期待している。

さらに「現場力」はプランを実践可能なものとするためにフィールドワークに自ら出かける機会を持つことをねらい、プラン作成に

接続することのできる歴史地理的なレポートを課すことで養うことにした。「協働力」は「グループワーク」の機会を設けて議論を重ね、共通のプランを作成することで身につけることとした。

以上のように、この授業では、地形図・フィールドワークの活用という観点も含めて、地理学、歴史地理学の力が大いに発揮できる形式になっていると考えられる。

課題となる旅のプランは、京都中心部4枚の2万5千分1地形図を市街地の範囲が特に入るように配布し<sup>10)</sup>、それに作成したルートを書き入れたうえで、最終的にはB4・1枚の地図に収まるように縮小コピーなどで調整したうえでの提出を求めている。A3サイズの方が大きくできるメリットはあるものの、

持ち歩くことを想定したとき、B4サイズの方が手に持ちやすいこと、小・中・高校の学校現場でA3を用いていない話を多々耳にしている、将来的な連関を意識するとB4の方にメリットがあると考えられること、などからB4としている。

また、必ず「コンセプト」を決めるように求めている。「テーマ性のある」旅のプランとしなければ、従来のピンポイント的に回る方法と何も変わらなくなってしまうからである。ルートを描く地形図とは別に、「旅のプラン」名、創造・提案者名、プランのコンセプト、プランの解説（ルートとそこを訪れる理由、歴史地理的背景など）、プラン創造後の感想を記入するB5用紙を配布し、「コンセプト」を決める意識を明確にってもらうように配慮している。

もう1つ、先述したように、旅のプランの創造と合わせて、歴史地理的なレポートを課しており、旅のプラン創造の準備とする位置付けとしている。後述する「グループワーク」の日程の都合上、旅のプランよりも後の提出となっているものの、これを「事前学習」として「フィールドワーク」できることが重要な鍵を握るという点については、授業中に話すようにしている。課題の内容は、Aは古代～中世、Bは近世～近現代の京都を理解することのできる景観・建造物・祭事等を1つ取り上げ、その歴史地理的背景と、現在の状況について述べる内容としている。地図と写真（またはイラスト）の添付を求めており、フィールドワークを促すように考慮した。

授業については、学生が課題として創造する旅のプランの内容を意味のあるものになくなくてはならないため、その基礎となる授業の部分を、学生がプランを組み立てやすくなるように構築する必要がある。そこで、歴史地理をベースとした12回の講義と文理融合授業（自然地理的な要素を含む内容）を1回行

い、地域の特徴を歴史地誌的に理解できるようにした。表3は、AとBのそれぞれの内容をシラバスから抜粋したものである。

歴史地理的な内容に関して、前期のAでは、京都の地形、平安遷都・定都に至る過程を解説し、平安京モデルを地形図上に描く作業を行い、貴族の空間認識、院政期の新街区、中世都市への変化などについて順を追って話をしている。後期のBでは、豊臣秀吉や徳川家康が施した京都の都市改造への関与をはじめとして、近世の旅、政治の中心に躍り出た維新前の情勢、東京奠都後に教育や産業の育成を通じて京都の復興と近代化を進めた姿などを話している。A・Bとも授業を通じて、足利健亮編『京都歴史アトラス』<sup>12)</sup>や京都市編（林屋辰三郎責任編集）『京都の歴史1～10』<sup>13)</sup>に掲載された図表を多く参照している。

残りの回については、グループワークを実施し、班別のプランを作成してもらっている。その際、各自の作成した旅のプランを参考にしながら、話し合いを行うようにしている。その他、授業回を終えたのち、京都大学の全学共通科目ではフィードバックの機会を設けているため、それに合わせて本授業では、提出された課題に対して振り返る機会を持ち、よりよい内容を目指せるようにできるように採点して返却している。

また授業とは別に、グループワークで作られたプランから選ばれたものを基本にしたフィールドワークの実施を計画しているが、日程調整が難しいため、2014年度は実施したが、2015年度は計画のみで実施できなかった。この点については、実施の方法に課題が残されている。

尚、授業に際しては、「出席カード」を活用し、メッセージに対する返答を授業時に行うことで、学生間でも共有できるようにしている。また、自ら撮影した写真をできるだけ多く活用するようにしている。筆者が授業を

表3 「地理と古典を活かした京都の旅の創造,提案A/B」の授業内容

| 「地理と古典を活かした京都の旅の創造,提案A」 |                                      |
|-------------------------|--------------------------------------|
| 1                       | イントロダクション — 歴史地理的なフィールドワークと社会調査の方法 — |
| 2                       | 遷都以前 — 京都の地層 —                       |
| 3                       | 平安遷都・平安定都 — 「万代宮」となるまでの過程 —          |
| 4                       | 平安京をめぐる位置関係 — 地形図を利用した平安京の理解 —       |
| 5                       | 平安貴族の空間認識 — 貴族の拠り所としての平安京 —          |
| 6                       | 説話にみられる空間認識 — 京内と京外の異なる認識 —          |
| 7                       | 中世都市への変化 — 町の構造の変遷 —                 |
| 8                       | 中世の京都 — 鎌倉・室町時代の京都の都市と経済活動 —         |
| 9                       | 大改造前夜 — 中世後期の京都の都市構造 —               |
| 10                      | 洛中と洛外の世界 — 『洛中洛外図』にみる近世初期の京都 —       |
| 11                      | 京都と水 — 京都の文化を作り上げた水 —                |
| 12                      | 京都と旅 — 「修学旅行」からの視点 —                 |
| 13                      | 旅のプランに関するグループワーク — グループ討議 —          |
| 14                      | 旅のプランに関するグループワーク — 全体討論 —            |
| 15                      | フィードバック (レポートの講評, フィールドワークへ向けたアドバイス) |
| 「地理と古典を活かした京都の旅の創造,提案B」 |                                      |
| 1                       | イントロダクション — 歴史地理的なフィールドワークと社会調査の方法 — |
| 2                       | 秀吉による京都大改造 — 天正地割・御土居 —              |
| 3                       | 近世京都の構造 — 町中の機能の変化 —                 |
| 4                       | 近世の京都の旅 — 洛外の旅と「都」 —                 |
| 5                       | 地誌・地図類に描かれた近世京都 — 近世の人々の「京都」の捉え方 —   |
| 6                       | 維新前夜 — 幕末の動乱と京都 —                    |
| 7                       | 東京奠都後の京都 — 町組改正・番組小学校 —              |
| 8                       | 京都の近代化 — 三大事業 —                      |
| 9                       | 戦前・戦中の京都 — 京都に残る戦時の影響 —              |
| 10                      | 現代の京都 — 京都の現代的課題とは —                 |
| 11                      | 京都と自然 — 都市・京都に影響する地形 —               |
| 12                      | 京都と旅 — 「修学旅行」からの視点 —                 |
| 13                      | 旅のプランに関するグループワーク — グループ討議 —          |
| 14                      | 旅のプランに関するグループワーク — 全体討論 —            |
| 15                      | フィードバック (レポートの講評, フィールドワークへ向けたアドバイス) |

A・Bともに2015年度用のシラバスとして筆者作成

行うに当たって、より実感できる解説を行えるようにするためである。

次項では、実際の授業内容について触れたい。

### (3) 歴史地理学と旅のプラン

授業では、内容と連動した旅のプランを授

業者(筆者)が創造し、配布(提案)しているが、基本的には旅のプランを軸に授業を進行させている。例えば、図1はAの第7回で院政期に京外に新街区が形成されることで平安京内外の構造が変化する話題を扱う際に配布している。白河・鳥羽院政の中心地である鳥羽を出発し、その次の時代の平清盛と後白河

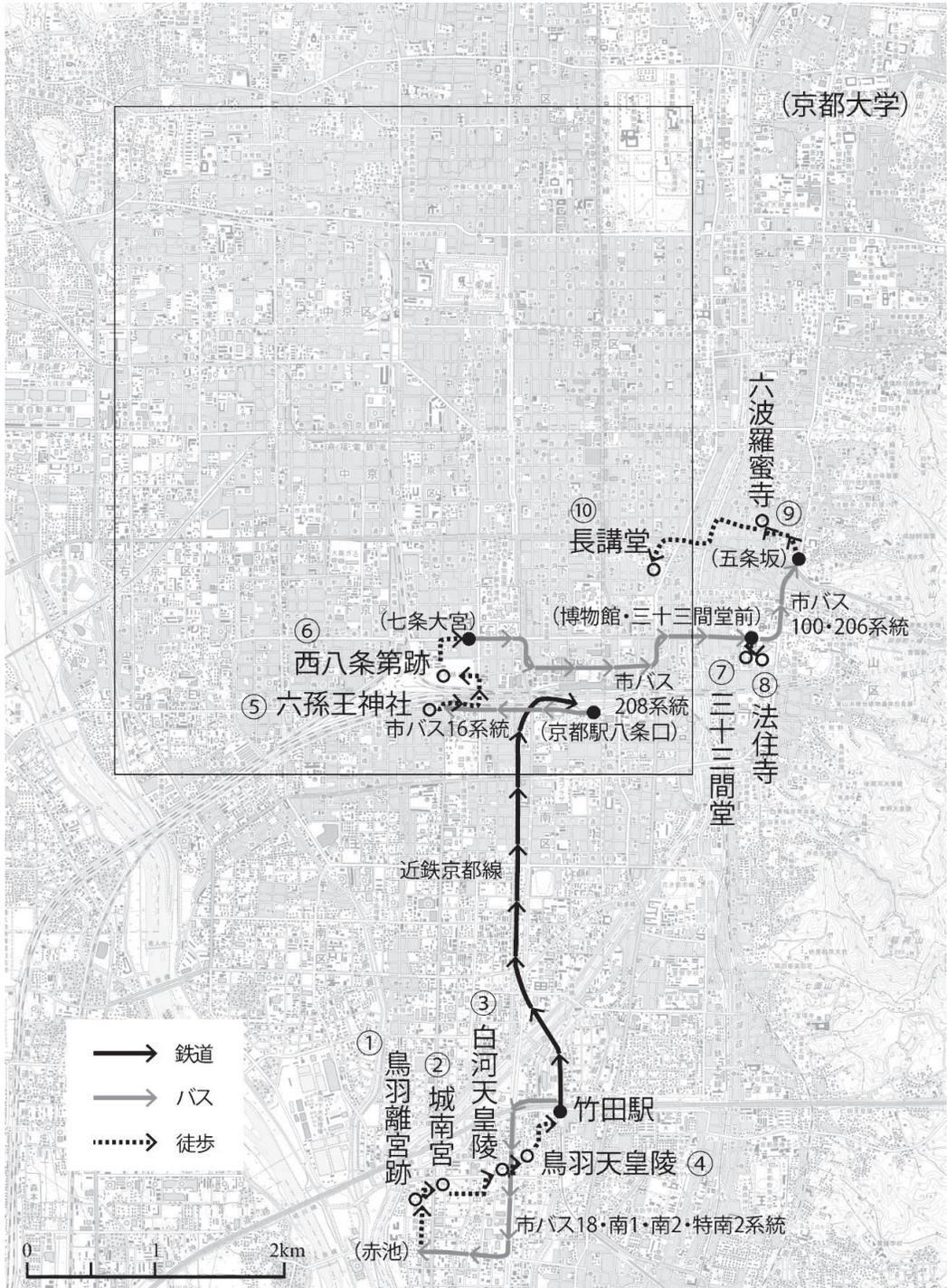


図1 安藤作成の「旅のプラン」：「院政期の京都—平清盛と後白河院—」（A第7回）

注) 基図は、2万5千分1地形図「京都東北部」「京都西北部」「京都東南部」「京都西南部」（平成17年更新）を使用した。また、平安京城は足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994を参考にした。

院に関係する場所をめぐり、最後に最終的な勝利者の形で残った後白河院に関わる「長講堂」で締めくくるという比較的時系列に沿ったプランである。

また、図2はBの第7回で幕末から維新・近代初頭にかけての京都の動きを理解するために配布している。明治天皇出生地「祐ノ井」から始め、公武合体に関わる場所<sup>14)</sup>、禁門の変関連の場所、出入りの頻繁だった公家屋敷跡などを経て、京都の近代化のために開かれていた「博覧会」の跡地や維新に功績があった三条実美を祀る「梨木神社」をめぐるという、こちらも時系列を意識したプランで

ある。これらはともに、プランの解説に合わせて、歴史地理的な解説を別の史資料も用いて補足している。

他に、Aの「京都と旅」の回では、近代の修学旅行を題材として、「大典記念博覧会」に合わせて島津製作所が作成・提案した「修学旅行」と高等女学校の「修学旅行」を取り上げ、京都でのフィールドワークの実例から学んでいる。これらの「修学旅行」は、京都を学びながらの旅を指している。また、Bの「京都と旅」の回では修学旅行と本授業開設の意義について解説しているが、これは旧稿<sup>15)</sup>で述べた歴史地理学を修学旅行と関連

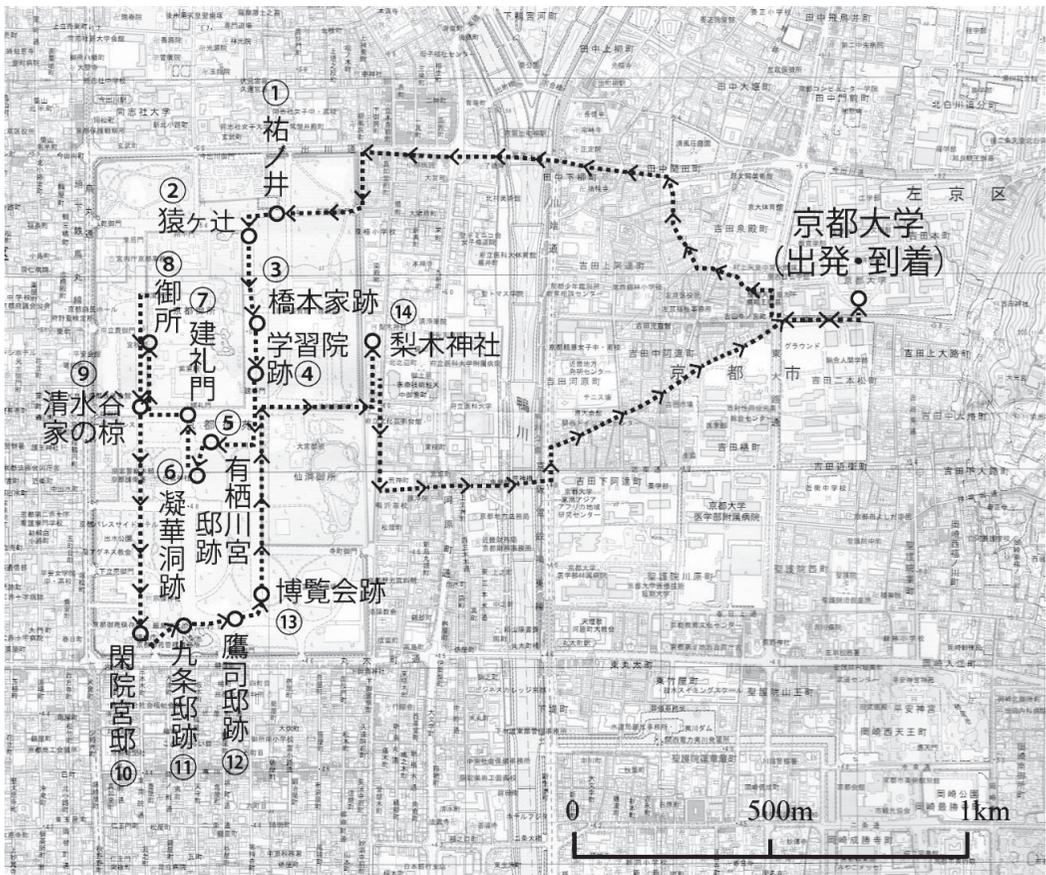


図2 安藤作成の「旅のプラン」：「幕末・維新を知る京都御苑散歩」(B第7回)

注) 基図は1万分1地形図「京都御所」平成17年



図3 COC授業の様子  
(2016年7月6日、文理融合授業時)

させる提案と共通している。

もう1点、Aの「京都と水」とBの「京都と自然」は、地下探査技術開発を専門とする先生と共同で文理融合授業を行っていることも特徴として挙げられよう(図3のように、一緒に授業を行っている)。京都の変遷について、「水」や「自然」を手がかりに京都の地上と地下の両面から探るという授業になっており、「地域資源」の捉え方としても、人文的な要素にとどまらない工夫を行っていると言える。

#### (4) 授業の意義

授業で用いている「出席カード」には、受講生の意見が寄せられているが、その中で、授業の意義につながると考えられる意見をいくつか取り上げる。

高2の時、京都・奈良に修学旅行できたのですが、理系は本当につまらなそうでした。ユニバとか行きたかったです…。

本授業の目的の延長上には、修学旅行後に以上の意見のような思いを抱いてしまう人を減らすこともある。旅のプランを作って実際の旅に出かけるという意義について広く理解を得ることが、修学旅行を有意義なものにする

ることにもつながると考えるからである<sup>16)</sup>。実は京都の寺社に関心のあった筆者でさえ、京都の修学旅行(高校)時に、班員の希望で清水寺に行ったことを、メモを見るまで失念していたほどである(他は覚えていたにも関わらず)。プランに意味がなく、「ただ行っただけ」では記憶に残らないと考えており、その場合には修学旅行の意義が半減しているだろうと推察している。

そういった点も踏まえて授業を行っており、以下の意見からは、受講生に授業の意図が伝わっていると考えられる。

私は、修学旅行で京都に来たが、何の説明もなかったから、こんな授業をしてほしかった。平安神宮に行ったが、「赤いね〜」で終わってしまった気がする。

この授業のおかげで、修学旅行にもっかい行けたら今度は前行った時より良いコースが作れそうです。

修学旅行ではうまくいかなかったものの、今後のフィールドワークでは授業での学びを活用して、意義のある歩き方ができると期待している。

さらに、歴史地理的な旅の意義が理解を得られていると思われる意見もあった。

ぼくは観光に行くとき少し予習をしたいタイプですが、何を調べているかあらためて振り返ると「歴史地理」だなと認識しました。

歴史地理により関心をもち、主体的に学べるようにする工夫を行うことに対して、現在のところ一定の成果が上げられているのではないかと考えている。

図4・図5は、受講生の作成した旅のプランの例である。図4は、平安京の遷都にも関

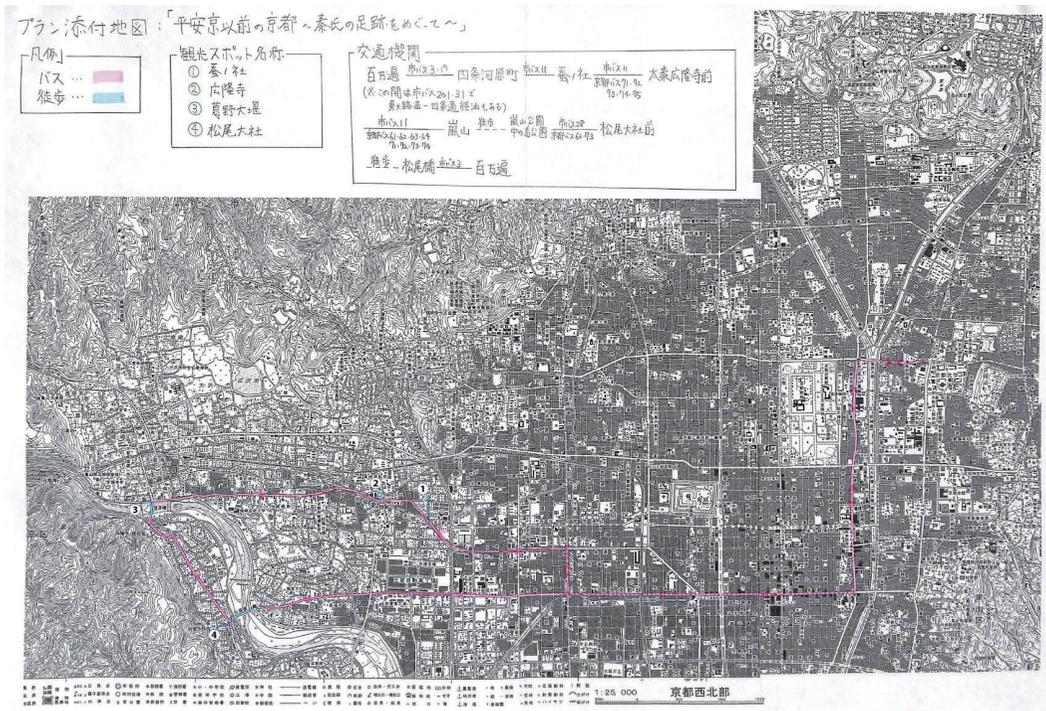


図4 受講生成成プラン：「平安京以前の京都～秦氏の足跡をめぐって～」(2014年度A)

注) ①～④は受講生が番号を記していた場所に、筆者が見やすく加筆した。

また本稿への収録にあたり、受講生が「1:25000」で提出した状態よりも縮小したが、縮尺の数値が入っている部分は変更しなかった(図5も同じ)。

与したと言われている、秦氏に関わる場所を巡るプランである。秦氏の氏寺である広隆寺や養蚕に関係していた秦氏と関わりに深い太秦の一带、氏神である松尾大社などを回るように組まれている。講義では遷都で秦氏の力が発揮されたと考えられることを解説しておりこれが反映されている。図5は、京都の鉄道史に関連する旅のプランである。路面電車を記念する場所、山科盆地を抜ける旧東海道本線などの京都における鉄道の発展をたどるように考えられている。講義でも岡崎公園で行われた第4回内国勧業博覧会と関連した路面電車や、京都市三大事業での電軌敷設の話題を提供しており、鉄道と京都の町の発展について意識した内容として活かされている。

どちらもテーマ性のある旅のプランが作ら

れているうえに、無理なく移動できるように考慮されており、これを用いてフィールドワークができる内容となっている。この課題からも本授業の取組に一定の成果が見られるものと推察される。

## V. まとめと今後の課題

本稿では、「地域資源」を活かすことができる教養教育での取組を示してきた。本稿で「地域資源」と関わって挙げられる特長は2点ある。

1つは、「地域資源」として考えられる素材を「自分で」見つけ、人に伝える点である。旅のプランを創造する過程で、テーマを決め、目的地となる場所を選ぶ作業を行っているが、旅のプランを「創造」だけでなく、



ころではあるが、まず目的に沿って歩く方法を身につけてもらうことによって、町歩きに慣れてもらおうと考えており、本授業での取り組みが好影響を与えることになるのを期待しているところである。

もう1つ本稿で指摘したい重要な要素があり、それは「教養教育」で歴史地理学の特性を活かした授業を行う意義である。できるだけ広範な学生にアプローチでき、歴史地理学の魅力も具体的に示せる機会であると考えらる。

ただし、結果として挙げた両者は決して無関係ではない。前年度のシンポジウム特集号で野間が「前年、前々年の共通課題である「旅・観光・歴史地理」との接続」が「地域資源の歴史地理」となった背景としてあった<sup>17)</sup>という点を述べているが、結果として筆者自身がその接続を実践していることになっているからである。「旅・観光・歴史遺産」に関係した旧稿で、小・中・高校での出前授業と修学旅行を組み合わせた提案を行ったが<sup>18)</sup>、本稿では大学での授業で「地域資源」を自ら探して旅の創造を行えるように考慮している。

このように歴史地理学が幅の広い発信のできる分野であるということを再認識するとともに、今後もより意義のある発信を継続していくことが課題となる。

(滋賀大学教育学部)

#### 〔付記〕

京都大学の大学COC事業を統括され、筆者の授業を共同でご担当いただいている京都大学大学院教育学研究科の高見茂先生をはじめ、地域連携教育研究推進ユニットにおられ、2015年度の授業をご一緒に担当いただいた江上直樹先生(現・福知山公立大学)、2016年度ご一緒に担当いただいている柴恭史先生・中島悠介先生、授業準備や課題の整理等を行っていただいているユニットの事務補佐員の峰元晴美さんに感謝申し上げます。また、半期授業の1回分を「文理

融合授業」としてご一緒に担当いただいている京都大学大学院工学研究科の後藤忠徳先生に、末筆ながら感謝申し上げます。

#### 〔注〕

- 1) 安藤哲郎「京都の歴史遺産と旅—授業実践を踏まえた歴史地理学からの提案—」歴史地理学55-1, 2013, 17~28頁。
- 2) 湯澤規子「シンポジウム趣旨説明「地域資源の歴史地理」研究の課題」歴史地理学58-1, 2016, 1~4頁。
- 3) 平成26年度「地(知)の拠点整備事業」パンフレット、文部科学省webサイト、[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2015/05/27/1358108\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2015/05/27/1358108_02.pdf) (閲覧日2016年4月25日)。
- 4) 「西成情報アーカイブ」(大阪市立大学・大学COC事業「大阪の再生・賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育の実践」webサイト)、<https://www.connect.osaka-cu.ac.jp/COC/nishinari/> (閲覧日2016年4月25日)。
- 5) 田中智麻「観光を題材とした地(知)の拠点整備事業の可能性」名古屋学院大学研究年報28, 2015, 21~37頁。
- 6) 安藤明伸ほか「宮城協働モデルにおけるCloud for Innovative Teaching (CIT) システムの開発と活用」宮城教育大学紀要50, 2016, 215~222頁。
- 7) 京都大学COC事業「COCOLO域」webサイト、<http://www.COC.kyoto-u.ac.jp/> (閲覧日2016年9月3日)。
- 8) この応募の少し前に、安藤哲郎「地図・古典を片手に巡る『古都京都の文化財』」地図中心490, 2013, 19~25頁において、世界文化遺産「古都京都の文化財」を周遊するプランを提示し、地図や古典に親しみをもって歩くことを提案した。
- 9) 京都観光総合調査(平成27年)、[http://kankocity.kyoto.lg.jp/chosa/kanko\\_chosa.html](http://kankocity.kyoto.lg.jp/chosa/kanko_chosa.html) (閲覧日2016年9月3日)。
- 10) さらに、京都が日本の中心であった時代も長く、京都の歴史地理を追うことで、日本の歴史地理の基礎的な部分に触れる効果も

ある。

- 11) 提出課題の大きさに合わせ、B4サイズで配布している。「京都東北部」は岩倉が、「京都東南部」は伏見が入るように縦長で印刷している。「京都西北部」は嵐山が入るように横長にし（縮尺についても本図幅のものが入るようにした）、「京都西南部」は長岡宮跡が入るようにして縦長にしている。尚、世界測地系に変更された平成17年更新の地形図を用いているため、市街地の重なりを工夫して印刷することが可能になっている。
- 12) 足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994。
- 13) 京都市編（林屋辰三郎責任編集）『京都の歴史1～10』學藝書林、1970～76（初版）。
- 14) 「橋本家」が和宮の生家であり、「有栖川宮」は和宮が許婚となっていた宮家である。
- 15) 前掲1)。
- 16) 安藤哲郎「京都への修学旅行と効果的な地図の作成・活用—事前の学習とも合わせて—」地図情報125, 2013, 24～27頁で、地図などを用いて事前の学習を行ってから修学旅行をすることが望ましいとする趣旨を述べたことがある。
- 17) 野間晴雄「総括：シンポジウム「地域資源の歴史地理」の成果と課題」歴史地理学58-1, 2016, 130頁。
- 18) 前掲1)。